

## ルイス・キャロルの家庭回覧雑誌 — Sylvie and Brunoの萌芽として —

平 倫 子

### I. はじめに

これは、ルイス・キャロル（本名チャールズ・ラトウィジ・ドジスン。彼が筆名ルイス・キャロルを使うのは1856年以降であるが、ここでは便宜的にそれを使用する。）の最初の作品群とされている家庭回覧雑誌の中から初めの二冊である『実益と教育のための詩』（*Useful and Instructive Poetry*, 1845）と『牧師館雑誌』（*The Rectory Magazine*, 1848）をとりあげてそれらと彼の最後の作品『シルヴィーとブルーノ』正編（1889）、続編（1893）とを一つの円環に位置づけて作品理解を深めようとする試みである。

『シルヴィーとブルーノ』第二十章にある「最後の出来事は最初のものの結果だ。だが、その最後のものの必然性は最初の出来事の必然性の原因である。」というアーサーの‘目的論’によりそい、また、T. S. エリオットの『四つの四重奏曲』の「リトル・ギディング」(V)の‘初めと呼ぶものはしばしば終わり／終わるといふことは初めといふことだ。／終わりはわたしたちの出発点だ。’に従い、終わりは初めにかえって一つになる、という考え方にならって進めてゆく。

拙論“ルイス・キャロルの子ども時代<sup>(1)</sup>”は、生まれてから十一歳までを過ごしたチェシャー州ダーズベリでのキャロルの生活を、遊びと日曜日の牧師館という二つの側面でもらえたものであったが、ここではそれに続く学校生活と家庭生活の中から浮かび上がってくる物書き癖（スクリブルマニア）という特性について見てみることにする。

## II. 『実益と教育のための詩』について

この雑誌は、ルイス・キャロルの最初の本で、彼自身の作品ばかり集めたものであり、タイトル・ページに‘W.L.D. and L.F.D.’とあるように、1845年彼が13歳のとき、7歳の弟ウルフレッド・ロングリーと、5歳の妹ルイザ・フレッチャーのために作ったものである。これはドジスン家の家庭回覧雑誌の最初のものであり家族みんなが楽しんだものである。つづく約10年間であわせて八種類の家庭回覧雑誌がキャロルの編集により次々に作られた。

キャロルは1855年に回覧雑誌の最後のものとなる「ミッシュマッシュユ」(1855-1862)を発行するとき次のような序文を書き、それらすべての雑誌の解説をした。

(詩人ミルトンの言葉を借りて言えば)「そしてもう一度」我々は、期待に胸ときめかせる熱心な読者のために、さらによい物を作ろうと思う。第四回目<sup>(2)</sup>(と言っても差し支えないと思うが)のお目見えにあたり、今までのものを振り返って将来に希望をつなぐのも意味あることであろう。

「過去をあてにするな、未来に目を向けよ」というマラプロップ夫人<sup>(3)</sup>の忠告と、わが家の家訓「聡明な展望を」(Respiendo prudens)に勇気づけられながら、今までの家庭回覧雑誌の歴史、起源、目的、発展、宿命などについてさっと触れておくことにする。

### 1. 「実益と教育のための詩」(Useful and Instructive Poetry)

1845年ごろのもの。最初の詩は「イートン校通信」に出ている詩から着想した。この雑誌は約半年続き、その後不体裁に綴じられ一巻にまとめられた。しかし中味を考えれば、装丁はあれで満足がゆく。現存する。

### 2. 「牧師館雑誌」(The Rectory Magazine)

これはみんなの投稿のために始めた最初のものである。はじめのうちは原稿がよく集まり、どの号も家族のみんなから強い関心がよせられた。家族の多くが一つか二つ寄稿した。1848年ごろ一巻にまとめられ、現存する。

3. 「コメット」(The Comet)

これは1848年ごろから開始された。まえのものと同じ形だが変化を付けたかったので、横びらきから縦びらきにした。この本は内容もとぼしく、あまり関心がよせられず、六回で終わる。最後のもの以外は破棄したため公にされていないが、最後のものは現存すると思う。

4. 「薔薇のつぼみ」(The Rosebud)

「コメット」とおなじ形式ではじめられたが二回で終わる。それぞれの表紙は水彩画による美しい薔薇のつぼみが描かれていた。二冊とも内容に見るべき物はないが、現存する。

5. 「スター」(The Star)

これも「コメット」、「薔薇のつぼみ」とおなじ形式のものであるが、「薔薇のつぼみ」よりスケールの点で劣る。本文も挿し絵も標準以下である。六冊現存する。

6. 「鬼火」(The Will-O'-The-Wisp)

前のものよりさらに劣る。本の形は三角にカットした。何冊かは探せば見つかると思う。

7. 「牧師館の雨傘」(The Rectory Umbrella)

この雑誌は1849年から1850年、既製のノートに書き始められた。当時これは賞賛をあげたが援助はまったく得られず、孤軍奮闘して一卷にまとめるのに一年以上かかった。ここでわれわれの手になるもので、上にあげた雑誌よりも多くの読者の目に触れた作品について書いておこう。1854年夏、われわれは「オックスフォードだより」(“Oxonian Advertiser”)に詩を二篇寄稿した。どちらも再録する価値はまったく無い。同じ年の夏休みにウイットビーで催された読書会に参加したとき、当地の週間誌「ウイークリー・ガゼット」に「杓もつ貴婦人」と「ウイルヘルム・フォン・シュミッツ」を寄稿した。こちらは二篇とも当誌に再録する予定である。

ではいよいよ新しい雑誌に話題を移そう。

## 8. 「ミッシュマッシュ」(Mischmasch)

「ミッシュマッシュ」はドイツ語である。英語で言えば midge-madge で、寄せ集めの意味であることは、言うまでもない。しかし編集の方針は、いかなる詩も散文も絵も、それぞれの価値を考えて十分に高い水準に達しているものを提供することにある。この雑誌に載ったもののうち、上出来のものは折にふれ、おおやけの雑誌に掲載される予定である。具体的に言えば『コミック・タイムズ』<sup>(4)</sup>である。そうすることで本誌の寄稿者は、その作品が英国国民の賞賛のまなざしに浴する機会が与えられるであろう。

クロフト 8月13日1855年<sup>(5)</sup>

1979年デニス・クラッチ改訂による『ルイス・キャロル・ハンドブック』によれば、『実益と教育のための詩』の原稿本(マニユスクリプト)は、五つの部分にわかれており、サイズは7×4.25インチ(18×11センチ)、ボール紙の表紙をつけて綴じられている。右側の29ページに本文が、左側28ページに大部分は未完成のままの挿し絵がある。文、絵ともにすべキャロルの作品である。原稿本は1932年のルイス・キャロル生誕100年記念展示会のとき展示され、のち1953年12月にサザビー社で競売にかけられた。現在はニューヨーク大学のエルマー・ハウムズ・ポブスト・ライブラリー蔵のピロール・コレクションに保存されている<sup>(6)</sup>。

この本は1954年デレク・ハドソンの編集で、本文とファクシミリによる数枚の挿し絵がロンドンのジェフリー・プレス社から出版された。ハドソンは序文で次のように言っている。

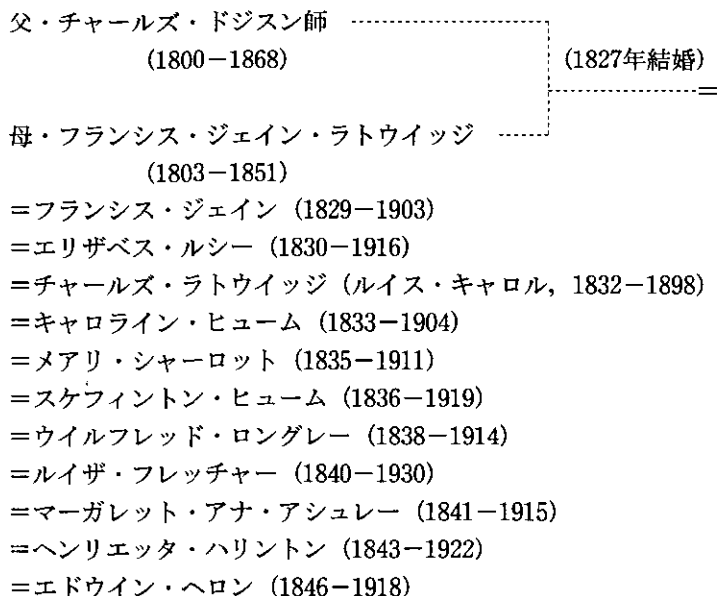
・・・ファクシミリをみると、13歳のキャロルの達者な書きぶりにびっくりする。挿し絵は稚拙だが、9枚は水彩画で、3枚が鉛筆画によるスケッチ、そのうちの 하나가手を加えられて表紙を飾っている。・・・これらの挿し絵はこれまで未出版だったが、複製の価値のない物をのぞいてここに7枚を取り上げた。本文はすべて再録した。そのなかの詩六篇は、メッサーズ編集によるマクミラン社版、ナンサッチ社版の『ルイス・キャロル全集』に納められている。キ

キャロルが、「この本は不体裁に一卷にまとめられた」と書いているのは、おおげさではない。のちの彼の出版のすべてにかんする好みのもむざかしさがおおよそ見えている。さいわい絵や本文に影響はなかったが、本の天と小口が無造作に切られ、ボール紙の表紙で縫い合<sup>(7)</sup>わされている。

キャロルが「不体裁に綴じられた」と言っているのは、1848年十月九日にラグビー校宿舎から、姉のエリザベスに宛てた手紙のなかに、「ウイルフレッドとルーシーの“実益と教育のための詩”はもう綴じましたか？」<sup>(8)</sup>という一文があることから、彼が綴じたのではなかったことが分かる。

ではこの雑誌が書かれた背景はどのようなものだったのだろう。

1843年一家はヨークシャーのノース・ライディングのクロフト牧師館に移り、1846年までに男四人、女七人の十一人の兄弟がそろそろ。以下に一家の系図を示しておく。



……ルーシー・ラトウイッジ (1805-1880)

(母親の妹で子どもたちの叔母、母親の死後ずっと彼らの母親がわりをつとめた)

ドジスン一家は、その地域では高い地位を保証されていたが、教育や宗教的な慈善事業に力をそそぎ、生活は質素であった。ドジスン氏は、クロフトに赴任したとき村に小学校がなかったので、私財を投じ、1845年クロフト・ナショナル・スクールを創設した。両親は子どもの将来を考え、娘たちには安全な保険を、息子たちには教育への投資を決めていた。牧師館という文化的ではあっても閉ざされた環境で、本を読みものを書く父親の姿を手本にして成長したキャロルが、ものを書くことに楽しみを見いだしたのもごく自然なりゆきであったのだろう。時代はややさかのぼるが、ブロンテ家の子どもたちが、同じヨークシャーのウエスト・ライディングのハウースの牧師館で、1826年から兄弟姉妹で手作りの豆本を作って楽しんでいた(「グラスタウン物語」, 「アングリア物語」, 「ゴンドル物語」) ことを考えると、両者のさまざま違いはさておき、父親が牧師、牧師館での生活、たくさんの幼い子どもたちを残して若死にした母親、子どもの養育と家事の責任を引き受けた叔母の存在と影響、家庭内の文庫から作家への道を歩む道のり、ペンネーム(ブロンテ姉妹ははじめ男性ふうのペンネームで女性であることを隠した経緯がある。)などの共通項の方に目が奪われてしまう。

キャロルは1844年8月1日、十二歳のときに家から約16キロ離れたリッチモンド・スクールに入学した。当時リッチモンド・スクールは、二代目ジェイムズ・テイト校長が跡を継いでおり、百二十人の生徒が在席していた。英国国教会のキリスト教思想、ギリシャ語、ラテン語、数学、フランス語などの科目はどれもキャロルにとって苦にはならなかった。数学と作文にすぐれた才能を見せたことが記録されている。学年歴は二学期制で、間にそれぞれ六週間の休暇があった。一学期が終わったとき、テイト校長はキャロルの非凡な才能をみとめ、両親宛に「交友関係は良く、会話も即妙で、学力は抜群、論理も明快であまりにすぎがないので、不明瞭なことは何であれきちんと解決しなければ満足できないのではないかと思われるほどです。」<sup>(9)</sup> という手紙を書いている。『実益と教育

のための詩』が書かれた1845年は、リッチモンドでの生活を始めた翌年で、彼は十三歳であった。学期が終わって家に帰る休暇は彼も家族もまちわびていたものであった。

クロフト牧師館の建物は、教会と道を一本はさんで建っており、前任者が植物学者であったこともあり豊富な植物が繁る大きな庭があった。「雨傘の木」として知られる大きないちいの古木は建物の左側にあり、裏手には壁で仕切られた広い菜園があり、その通路は中心で交差するようになっており、キャロルが手押し車、樽、ちいさなトロッコを使ってきょうだい達のために考えた「汽車ごっこ」の駅のためにうってつけの空間だった。彼がつくった「汽車ごっこ」の規則は次のようなものである。

駅長は駅に気を配り、おやつをださなければならない。駅長は言うことを聞かないものを汽車が庭を一周する間、牢屋へ入れることができる。彼はベルを鳴らして客を席に着かせ、ゆっくり20数え、しかるのちに出発進行のベルを鳴らさなければならない・・・客はいかなる理由があっても線路に入ってはならない。親になったものは子どもの面倒をみること。汽車の進行中に汽車に入ったり出たりしてはならない。料金分として運転士をのぞくすべての客に等しくお金が渡されるので、親になったものはその子どもの分もとっておくこと。お金のないものは駅のどれかで働くこと。・・・汽車転覆のさいは、すべての客は助け出されるまでじっと横たわっていること。すくなくとも三台の汽車が彼らを轢いていかねばならない。それから彼らは医者<sup>(10)</sup>と看護婦たちの手当を受けることができる。

学校でも家庭でもキャロルは家長的、教師的な一面をのぞかせており、のびやかな子ども時代というよりは、優等生として、あるいは長男として期待され、その責任感から年齢以上の“大人”を演じなければならぬ面が多かったようである。これは『シルヴィーとブルーノ』の中で、次のように言うくだりからも察せられる。

「子どもの頃、日曜日の朝目を覚ますと、金曜日からはじまって

いた憂鬱な予感にはりつめていました・・・「早朝に起き、家での祈祷がある場合は八時まで聖歌と聖書の一部を暗記させられ、それから朝食でしたが、すでに耐えてきた精進と、それにつづく恐ろしい一日のために、楽しく食べられるどころではありません。

「九時には日曜学校です。村の子どもたちと同じ組にいれられて、憤慨すると同時に何か間違いをして彼らより下になりはしないかと心配したものです。

「教会の礼拝式はまぎれもなくシンの荒野でした。その荒野をさまよいながら、家族席の裏張りや幼い弟たちのせかせかした態度、それに月曜日には記憶をたどって説教をまとめなくてはならない、そして出来いかんで運命が定まるという恐怖、そうしたことにわたしの思考の幕を張り巡らしたものです。

「そのあと一時に冷たい食事（使用人達は仕事がやすみです）、二時から四時までまた日曜学校、六時に夕べの祈祷です。この間の休憩時間は不毛な書物や説教を読むことで、いつもの罪深さを軽くする努力をしなければならなかったので、おそらく最も大きな試験の時でした。そんな日でも、ずっと先にただ一つバラ色のときがありました。それは「就寝の時間」でした<sup>(11)</sup>」

『シルヴィーとブルーノ』の序文の冒頭でキャロルはこの部分を「人から聞いた話と友人からの手紙の引用」と特に断っているが、彼の体験から出ていることは疑うべくもない。

次に『実益と教育のための詩』の個々の詩をいくつか見てみる。全部で十六篇の詩があり、殆どの詩に教訓が付いている。これらは大きく分けると次のようになる。

- (1) タイトルが示すとうりの教訓的なものと当時話題になっていたものをパロディー化したものなど、どちらかと言えば模倣に近いもので「ぼくの妖精」、「頑固な男」、「時間厳守」、「慈善」、「反逆者の裁判」、「事実」、「寓話」、「規則ときまり」などが含まれる。
- (2) ノンセンスなものや不思議な印象を与えるもの、パロディーも含むが、時代の気分を反映した想像性のあるもので「メロディーズ」、「しっぽのお話」、「改良をほどこしたシェイクスピアからの引用」、



「兄弟姉妹」, 「ジェンキンズちゃん」, 「釣り師の冒険」, 「クララ」,  
「訪問者」などである。

十六篇のうち、のちに『ルイス・キャロル全集』に収録されたものは、  
「ぼくの妖精」, 「時間厳守」, 「メロディーズ」, 「兄弟姉妹」, 「事実」,  
「規則ときまり」の六篇で、『ルイス・キャロル全詩集』に入っている  
のは「メロディーズ」だけである。

〈1〉からは、「ぼくの妖精」と「寓話」の二つを〈2〉からは、「メロ  
ディーズ」, 「改良をほどこしたシェイクスピアからの引用」, 「ジェンキ  
ンズちゃん」, 「訪問者」の四つをとりあげ、個々にみてゆくことにする。

\* 「ぼくの妖精」

ぼくについてる妖精が  
眠っちゃいけないって言うんです  
あるとき怪我して叫んだら  
「泣いたりしてはいけません」

つい楽しくてニヤリとすれば  
笑っちゃいけないって言うんです  
あるときジンが飲みたくなると  
「それを飲んではいけません」

あるときご飯が食べたくなると  
「それを食べてはいけません」  
勇んで戦にはせ参じたら  
「喧嘩をしてはいけません」

悩み疲れてぼくは訊く  
「していいこと何かある？」  
妖精しづかに答えていわく  
「質問してはいけません」

教訓：「汝、するべからず」<sup>(12)</sup>

ここにも、気ままな妖精ではなく堅苦しい妖精が登場している。『シルヴィーとブルーノ』第十四章には、名前を尋ねられたブルーノが、『「どうぞ」と言わなきゃだめだよ」と言うところがあり、語り手(ぼく)は子どものころを思いだしながら「きみは子どもたちにいい子にしないさいって教える妖精なの?」と聞くと、ブルーノは「とっても面倒だけどときどきそうしなくちゃならない」と答える。妖精すなわち「もう一人の自分」は、父親像に限りなく近い。キャロルの子ども時代の伸びやかでない閉ざされた一面が二重写しになるところである。

\* 「寓話」

イスラムのエミール王様、玉座にすわり  
國中荒らして、残ったのは彼一人。  
マフティ主卿がやってきて  
学識ゆたかに話しはじめた  
「とうさんふくろう木にとまっていた、  
むすこのふくろうは嫁ほしかった  
おれはあととり、おやじの財産たんまりほしい  
おやじは答えた『こら、むすこ、  
わしにはやるべき財産ないが、  
わしももっても長くて一年、  
そしたらきつとおまえにやろう  
あれてはいるが畑100枚』  
ここでマフティ話をやめて、じっと王様の顔を見ると  
王様はポロポロ涙をながし  
一時間もかながえていた  
そんなのは今までにないことだった  
王様は自分の行いを改め国民を祝福した  
(もう二度と国民泣かせをしなかった)  
そして国じゅうしあわせに満たされた。  
(しあわせの深さは50センチ)

教訓：「行いを悔い改めるべし」

ここでは王と国民の力関係が父と子のそれになぞらえられている。

\* 「メロディーズ」

I. そのむかし リードルの老人

針で顔に穴あけた  
皮膚をつきぬけ  
もっと深く掘りさげた  
なのに奇怪 老人 役場に就職した

II. そのむかし 反物屋の癡癡老人

茶色い紙の帽子をかぶっていた  
いい線いってはいたけれど  
どこかしまらない感じである  
その原因は「蒸気」だと 老人はいう

III. そのむかし オポータの若者

日ごとに背たけが縮まった  
その原因は 頭の上の  
木箱だと 彼はいう  
とびきり重い漆喰が入っているのだそうな

その妹のルーシー・オフィナー

こちらはだんだん痩せほそる  
その原因はいうまでもない  
雨の降る日も外で寝て  
ご飯をひとくちももらえなかったからだ (高橋康也訳)

リメリックという当時流行の詩形のみならず、内容、挿し絵とともに、E. リア (1812-1888) と比較される詩である。ふたりの出会いはなかったらしいが、アン・クラーク・アモーはリアの『ノンセンスの絵本』(A Book of Nonsense) は、刊行は1846年だが、詩が作られたのは1832年から36年ごろで、ノーズリーに住むダービー卿に動物の標本画をたの

まれ、卿の子どもたちを楽しませるために作ったものでその評判が広がって地理的にそれほど離れていないキャロル家の人たちも目にした可能性は高い、と見て<sup>(13)</sup>いる。リアのリメリックは最終行は一行目の繰り返しが多いが、キャロルのリメリックは最終行が一連の内容を締めくくるところになっているのが特徴である。

\* 「改良をほどこしたシェイクスピアからの引用」(網をかけたところは、キャロルが「改良」した部分)

ウオリック：よろしければ殿下もごいっしょにおいでください。

王子： いや、私はこのまま父上のおそばにつきそっていたい。

{ハル王子以外退場}

なぜ王冠を枕もとになどおいておかれるのだろうか？

閨の友としてこれほどわずらわしいものはないはずだが。

ああ、磨き上げられた不安のもと！黄金の心労の種！

おまえは眠りの門を大きく開いて、いかに多くの不眠の夜を招き入れることか！それを抱いて眠っておられるとは！だがその眠りは、手製の粗末な寝帽子(ビゲン)をかぶり、大いびきをかいて一夜を過ごす連中の眠りにくらべれば、半分も深い安らかなものではあるまい。

王： ハリーよ、今お前がいった言葉の意味がわからないが。

王子： どの言葉ですか、父上。

王： ビゲンという言葉だ。

王子： ナイトキャップのことです。

百姓たちは寝る前に疲れた頭をそれで縛り付けるのです。

王： ありがとう。先を続けなさい。

王子： いびきをかいて一夜を過ごす連中の眠り。ああ王座よ！お前はそこに座るものの心をさいなみ、夏の日盛りに重装備をつけた兵士のように、身の安全を保証しながら身を焼く苦しみをなめさせるのだ。

王： やけどは保証などできはしない。

なぜなら、焼けてひりひりする皮膚に熱さと熱と水ぶくれ

をもたらすのだから。

王子： どうかそんな邪魔をなさらないように。「唇のあたりに鳥の柔毛がついている、それが微動だにしない」

王： そんなものがついているとは知らなかった。ブランで吹き払うがよい。

王子： 「息をされているなら、あんなに軽い柔毛のことだ、動かぬはずはないのだが。

王： すでに動いておるであろう。

王子： いや動いておりません。「陛下！ 父上！ 永の眠りにつかれたか。このような眠りが、古来いくたび、イギリス王の頭上から黄金の冠（リーゴル）を奪い去ったことか。

王： 今いったリーゴルとはどういう意味じゃ、ハリー。

王子： 陛下、私も知りません。リズムがびったりありますが意味はわかりません。

王： そうであろう、一体意味の無い言葉をなぜつかうのじゃ？

王子： 陛下、その言葉は発せられたのです。私の口を通過したのです。

それを言わずにおくことは、地上の力すべてをもってしてもかないません。

王： そうか。続けなさい。

王子： 「イギリス王の頭上から黄金の冠を。わたしからあなたに捧げるべきものは、血を受けた子としての涙と、深い悲しみです、

それを、肉親の情と、愛と、真心をこめて、  
ああ、父上、あなたに惜しみなく降り注ぎます。

あなたから私に賜るべきものは、この王冠です、ごらんください、ほら……」

王： こいつはおまえのものではないぞ！ とんでもない！

王子： 陛下、それはわたくしのものです！ どうして異をおたてになるのですか？ そのうえ眠っていらっしゃるあなたに、どうしておわかりになるのです、ほかの人間のひとりごと

- が？
- 王： おまえの理屈は間違っておる。それは事実だ。いくら議論をしても事実は事実、そのことが明白になるだけだ。
- 王子： そんなはずはありません、陛下！
- 王： 可能性があるとかないとか、わしはいつておらぬ。ただ事実は事実だと申しておるのだ。
- 王子： お言葉ですが、陛下、ありえないことは起こり得ません。したがって陛下のおおしやることも起こりえないのです。
- 王： おまえはどちらを否定しているのだ？わしがおまえの言うことを聞いていたことをか？それともわしが眠っていることをか？
- 王子： 陛下は眠っておられます。
- 王： もうやめよう。おまえは理論的な思考にはむいていない。
- 王子： あなたから私に賜るべきものは、この王冠です、受け継ぎます。ごらんください、わが頭上にある王冠を。これを神がお守りくださるでしょう、そして、たとえ全世界の力が巨大な一本の腕と化そうとも、私からこの正統の榮譽を奪うことはないでしょう。私はこれを  
私の子孫に伝えます、私が父上から伝えられたように。<sup>(14)</sup>

これは、『ヘンリー四世』第二部、四幕四場からの引用で、眠っている父王のそばでヘンリー王子が独白する場面である。王が王子に言葉の意味を訊ねるなど、父と子の立場の逆転があり滑稽味もあるが、それ以上に眠りと覚醒のはっきりしない中間状態を捕らえているところは『鏡の国のアリス』での赤の王の夢とアリスの存在に関する議論につながり、のちのキャロルの眠りと夢のテーマに結びついてゆく。ハドソンは、“可能性”について論じているところは論理学者キャロルを予見させる、と言っているが、そのやり方は『鏡の国のアリス』でハンプティ・ダンブティがアリスを相手に言葉を説明する場面にもそっくり繰り返されている。

\* 「ジェンキンズちゃん」

ジェンキンズちゃんたのしくてピョンピョン  
砂場であそんでいた；  
ふとった手にはおもちゃがいっぱい  
そしてお口にケーキがいっぱい

その時どこからか  
ぞくつとするような声をした  
「お家にお入り、そーっとね  
おまえに小包がきてますよ」

ジェンキンズちゃん家に入って  
みるとテーブルの上に小包ののっていた  
玄関マットで足を拭いていたら  
お母さんが言いにくそうにこう言った

「きっと靴下片方か、手袋片方でしょうね」  
ジェンキンズちゃんはお母さんの顔にいっぱいキスした  
なぜってその小包が  
「ジェンキンズ様」宛だったから

教訓：「クロフトからの贈り物」

この詩には子どものなまの姿が出ている。棒馬にまたがって夢中で遊んでいた子どもが自分宛の小包をみて、しかも「クロフトからの贈り物」だったので、うれしさのあまり母親に抱きついてキスをする、という稚拙でありながら子どもの気持ちが伝わってくる詩で、寄宿生活を送っていたキャロルの経験がストレートに表現されている。「クロフトからの贈り物」がどんな意味を持つものかを家族に伝えたかったのだろう。ほかの詩とは異質のものである。

挿し絵の棒馬も象徴的である。(図1参照)。美術史家のE. H. ゴンブ

リッチはその著『<sup>(15)</sup>棒馬考』のなかで、芸術は棒馬にはじまることを詳細に解いている。すなわち、棒馬は馬の頭の形を棒の先につけた馬の代替物であるが、子供はそれで遊ぶことで己れの方で棒を馬にする。棒馬は模倣から創造への第一歩をする。『実益と教育のための詩』のほとんどの詩に挿し絵がつけられていた、とハドスンが解説しているが、詩のイメージを視覚化しようとする試みは、ゴンブリッチによれば、詩に額縁をつけるようなもので、自分の作品の観察者になれると言う。キャロルが詩に挿し絵をつけて作品を客観化したことは、そのまま作家への道につながるものであったと言って良いだろう。端的に言ってしまえば、キャロルは棒馬をペンに持ちかえるのである。

ゴンブリッチは、また「ロマン主義時代における  
図像表現と芸術」で、J. H.

フューセリによる不気味な妖怪「夢魔」(1783) (図2参照) や、ジェイムズ・ギルレーの幽霊の版画「ファンタズマゴリア」(1803) (図3参照)<sup>(16)</sup> などに見られるサタン、魔女、炎火、諸諺や情念、恐怖などを風



図 1



図 2



刺画として表現する時代的傾向をあげている。フロイトが「無意識」や「夢」を学問として体系化する前に、キャロルは夢や眠りを詩で表現し絵に描くことで、のちに自らの詩集『幻想魔景』(1869年)の題にもなる「ファンタズマゴリア」的なものの流行にいち早く反応していた、と見ることが出来る。



図3

\* 「訪問者」

もしもあなたが何でも知りたいとおっしゃるのなら、お話ししましょう  
私が本を読んでいたら  
ドアをノックする音が聞こえました  
西風みたいにそっと。  
耳を澄ましていたら、また聞こえたので  
声をはりあげてさげびました  
「待っていないでお入りなさい、そして  
どなたかおっしゃって下さい。」  
彼は静かに部屋に入ってきて、帽子をとって手に持ち  
手袋をぬいで、  
しずかに丁寧におじぎをしたのです、それで私は  
いらいらして  
「一体誰だ！」と大声で叫びました、すると彼は

帽子を胸に当てて深々とおじぎをして  
物静かな調子で言いました、

「私はあなた様の下僕でございます、ボ克蘭シュウル様。」  
私はまだ召使いを呼ぶベルをならしていなかったので、

「おい！トム、ディック、ジョージ、アンドリュウ！  
ここに来てこの見知らぬお方を出口まで案内しなさい！」と叫びま  
した。

私の呼び出しで召使いたちはやってきて、そのとうりにしまし  
た：

まもなく出口に案内された彼は、もう一度

くると振り向いて深々とおじぎして

それから胸に手を当てて、

この上なく静かに立ち去って行きました。

呪術的な雰囲気のあるぞくっとするような不思議な詩であるが、正体  
が風だということに気が付いてしまえば、一変して愉快な詩になる。子  
どもは「見ている」ものを描くのではなく「知っている」ものを描く、  
とゴンブリッチは指摘している。

### III. 『牧師館雑誌』について

デニス・クラッチ改訂の『ルイス・キャロル・ハンドブック』によれ  
ば、『牧師館雑誌』の原稿本はそれぞれにキャロルの序文がついた12ペ  
ージのもの九つで構成されており、総目次がついている。すべてキャロ  
ルの手書きである。全体は116ページで、サイズは7.25×4.5インチ  
(18.5×11.5センチ)で、クロス張りのノートに書かれた。

タイトル・ページには、「この牧師館雑誌は / 牧師館に住む人々がそ  
の才能をもって著した / 最上の物語、詩、エッセイ、絵からなる / 編集  
と印刷、C. L. D.\* / 改訂第五版 / 1850」と書かれ、次のページの献辞は、  
「クロフト牧師館に住む一家の人々 / そして特に若い人々に / 彼らの労  
作も含む / この雑誌を / 編集者より謹んで捧げる。」とある。(\*C. L. D.  
はチャールズ・ラトウィッジ・ドジスン。)

原稿本は1932年まではドジスン家に保存されていたが、生誕100年記念展示会のあと、コム・デ・スザンヌのコレクションに移り、1935年サザビー社の競売にかけられた。現在はオースティンのテキサス大学、ヒューマニティー・リサーチ・センターが所蔵している。1975年、同リサーチ・センターのジェローム・バンブの序文付きでファクシミリ版が出版された。<sup>(17)</sup>

この雑誌は半年で終わったことが、最後の序文からわかるが、タイトルページに1850年一冊の本にまとめた時が改訂第五版、とあることから、1848年に創刊されてから二年間にキャロルは再々手を加えていたようである。

この雑誌の一番の特徴は、家族が寄稿したことである。執筆者は、ルーシー・ラトウィッジ（叔母）、エリザベス・ルーシー、チャールズ・ラトウィッジ（ルイス・キャロル）、キャロライン・ヒューム、メアリ・シャーロット、スケフィンソン・ヒューム、ウイルフレッド・ロングリー、ルイザ・フレッチャーの八人で、全作品数は六十あり、そのうちキャロルによるものは四十五で、その内訳は九回の序文 9、「シドニー・ハミルトン」や「クランドル・カースル」など物語がそれぞれ九回連続で18、詩 9、書評 1、質問の回答 8である。九篇の詩のうち、「ホラズ」は、1932年生誕100年の年に始めて出版され、のち『ルイス・キャロル全詩集』と『ルイス・キャロル全集』に収録された。また、「ある日の出来事」という詩ものちに『全詩集』と『全集』におさめられた。この雑誌が書かれた1848年キャロルは、トマス・アーノルドの教育方針が世間にひろく認められていたラグビー・スクールで学校生活をおくっていた。1846年の入学時はアーノルドの死後四年たっており、アーチボルド・キャンベル・テイトが校長だった。規模の大きいラグビー・スクールは当時生徒が500人おり、違法行為を防ぐために組まれた厳しい日課、新入生のこむむいじめ、学校の支配をたくされていた監督生の権力など、体制がリッチモンドの家庭的な雰囲気とは全く違っていて、キャロルには非人間的なものに映った。そのうえ吃音が彼の立場をさらに困難にしたようである。ラグビー・スクールの伝統あるスポーツ「ビッグ・サイド」フットボールも彼にとって楽しいものではなかった。さらに悪いことに、ラグビー・スクール在学中の1848年3月に百日咳に

り重い症状が続いた。回復後まもなく10月にはおたふく風にかかり、右の耳に後遺症が残った。この時の気管支炎と難聴に彼は生涯悩むことになる。

しかしキャロルは、数学、神学に秀でた才能をみせた。そのころ彼は、父親の意見をききながら自分の蔵書を価値あるものにしようとしていた。新刊の本、話題の本や雑誌に目配りをし、自分の読みたい本のリストを手紙に書いて送ったあと、「パパの返事がまだもらえない」とこぼしている姉宛の手紙がある。読書の量もさることながら、読んだ本の内容のみならず、装丁や編集にも細かく関心を寄せていたことは、彼が「牧師間雑誌」に書いた序文、書評、質問への回答などに表れており、長編ものを連載形式にするやり方なども自分たちの雑誌にさっそくとり入れている。キャロルの豊富な読書の範囲とそれらから受けた影響は、物語の枕辞につかわれている、シェイクスピア、ディッケンズ、ジェームズ・トムソン、ドクター・ジョンソン、スコット、トマス・グレイ、クーパー、ゴールドスミス、オシアン伝説、ジョージ・クラブなどの名前からもうかがえる。

内容を見ると、「スリリング」、「ある日のできごと」ではノンセンスが、長編「シドニー・ハミルトン」、「克蘭ドル・カースル」では風刺やパロディーが、序文「ボツにする理由」、「あざみ考」、「一般的なこと」、「さび」、「しかし…」、「ミルクの瞑想」、「インクの断章」、「望遠鏡について」、「終結にあたって」には真面目さの半面ユーモアが特に目立つ。ほかにも謎解き、語呂合わせ、方言、造語などキャロルの芸術を特徴づける言葉への愛着が顕著に見られる。兄弟姉妹の寄稿のほかに、叔母ルーシー・ラトウッジの「お手伝いさん急募」という愉快的な広告もある。仕事はたっぷりでお給料は控えめ、と書かれたこのまがいな広告文は、夫の牧師の仕事の補佐をしながら十一人の子どもの世話に追われるルーシーの姉、つまりキャロルの母親をみて、思いあまってる寄稿であったかもしれない。(1851年母親は急逝する。その後ルーシーは生涯母親がわりをつとめることになる。)

ロジャー・ランズリン・グリーンは、「ヴィクトリア朝時代、自分たちだけで雑誌を出すことはめずらしくはなかった。ちなみに、ディッケンズの「ホリデー・ロマンス」はキャロルの雑誌よりずっと以前に出て

いた。しかし「牧師館の雨傘」も「ホリデー・ロマンス」も子どもたちによって書かれたものではない。「牧師館雑誌」は、正真正銘の家族ぐるみの雑誌であった点で先行していることは記憶に値する。<sup>(18)</sup>と言っている。

キャロルが1856年以降ずっと使い続けたルイス・キャロルという筆名へのこだわりの第一歩が、「牧師館雑誌」で彼が使った七種類のペンネームに見られる。

次に「牧師館雑誌」から、「ボツにする理由」、「さび」、「ホラース」、「テラース」を見てみることにする。

\* 「ボツにする理由」

（枕辞にシェイクスピアの『ハムレット』三幕一場から‘Aye there’s the rub’「そこだ つまづくのは」の引用がある。）

新しい雑誌をはじめる時は、いつも編集者にとって気がかりである。問題は「もし失敗したらどうしよう」ということである。この雑誌の運命は編集者にも予測がつかない。

確信にみちた予測、つまりもっとも才能があつて、能力にめぐまれたこの国のあまたの男女の作家がいる中で、「牧師館雑誌」が何万もの人たちから異口同音の自然発生的な賛辞、拍手をもらう時の到来こそ望むところであるが、そうなったらこの雑誌は、イギリス文学における主要なものの一つになるし、子どもたちは「Reasonings and Rubbish」からとつた綴り字の練習帳をたどどしく読むことになる。

・・・編集者として、二言、三言いわせてもらえば、うれしいことに、寄稿者はすばらしい才能がみられるものを寄せてくれている、がせつかくの寄稿も、これまでに編集者が読んだものから判断して、文筆の才能は十分認められるにせよ、そして二、三の例外はあるにせよ、子どもつぼいものが多かったので、苦い思いでボツにせざるを得なかった。編集者としてはさらなる援助をお願いする次第である。さもないとこの雑誌はまきをくべない暖炉のように、悲しくも消えてしまう運命にあるのだから。

これは編集者としての気負いがにじみでている一文である。家庭内でのこととは言え、十六歳にしてこの腕であったことがわかれば、後年自分の本の出版にあたって、マクミラン社と交わした細を穿った手紙は何の不思議もないように思える。

\* 「さび」

(枕辞は「騎士どもは土にかえり、彼らの名刀はさびぬ。」)  
赤さびやさびは、湿気にさらされた鉄に着く。銅に着くのは緑青という。

しかし、さびはあまり深く腐食はせず、いったんさびるとその下の金属をまわりから保護する役目もする。さびは比喩的な意味では金属のほかにもつく。

すなわち、心のさび、知性のさびである。編集者が一番おそれるのは、われらの雑誌がさびつくことである。車輪がなめらかに回るよう車軸にたっぷり油をさそうではないか。そうすれば、諸君のウィットという扇でさびを吹き飛ばすことができ、あらゆる障害をとり除くことができる。・・・今朝、あふれんばかりの原稿を期待して投稿箱をあけたところ・・・これを書くペンは引っかけりインクはかすれるのだが・・・中は空っぽだった！

さびの本性を言い表すもう一つの言葉を紹介しておこう。銅の酸化物は緑青で、鉄の酸化物 (oxide) は、そう、牛の目 (ox-eyed) と言うのだ。

四回目で、編集者は序文にこう書かなければならない状況にあった。言葉のもじりと、びっくりして目が飛び出した編集氏の挿し絵とをそえて、自らウィットの扇を示さざるを得なかったのであろう。

\* 「ホラーズ」

さだかならぬ恐怖の立ちこめる  
なにやらおぐらい場所を歩いていた

空中には無数の顔がぎっしりと浮かび  
大地は夜の闇だった

と 迅速に近づいてくる物の怪  
おそろしげな緑の顔  
人肉を食らいきったその姿は  
見るだにすさまじかった

口もきけず 逃げもできぬままに  
ぼくはその場に倒れ伏し  
異形のものがおぞましい眼差しで  
ぬっと顔を寄せてくるのを見た

思わずもらすうめき声  
底深いおびえ そのただなかで  
ぼくは聞いた…「目をさまして ジョーンズさん！  
そんな大声出して！ 夢ですよ！」

(高橋康也訳)

夢の不思議なゆがめられた世界への執着が見られる。この詩は1850年にこの雑誌のために書かれ、1932年生誕百年の年にはじめて出版され、のちに『全集』および『全詩集』に収められた。この詩を読むとき、さきにあげたフューセリの「夢魔」をそばに置いてみると理解しやすくなるように思う（図2参照）。「ホラーズ」は、『牧師館雑誌』に載せたキャロル最初の詩で、B. B.のペンネームを使用している。彼はその後しばらく詩作にはこのB. B.を愛用した。（1856年になって詩を寄稿していた「トレイン」誌の編集長エドマンド・イエツのすすめで筆名をルイス・キャロルにする。）『牧師館雑誌』では彼は、V. X./B. B./F. L. W./J. V./F. X./Q. G./R. Y.と七種類の署名を使い分け、ほかに編集者の序文は文字どおりEd.を用いて書いた。

「ホラーズ」の詩形で注目すべきことは、最後の連の最終二行の会話体の部分である。この言葉で“ぼく”はこちら側にもどる。この詩形は、

『シルヴィーとブルーノ』正，続編で，狂った庭師の歌う詩によって繰り返される。すなわち，

横笛かなでる大きな象  
たしかに見たと思ったが  
よくよく見れば  
女房の恋文  
そこであいつは言ったのさ  
「思い知ったよ この世の辛さ」

暖炉のうえのバッファロー  
たしかに見たと思ったが  
よくよく見れば  
妹の亭主の姪  
そこであいつは言ったのさ  
「すぐ出ていかなければ 警察を呼ぶぞ」

われこそ教皇と自認する論法を  
たしかに見たと思ったが  
よくよく見れば  
まだら模様の石鯀  
そこであいつは言ったのさ  
「この事実には あらゆる望みも消え失せる」<sup>(19)</sup>

\* 「テラーズ」

「テラーズ」は八連の詩であるが，最初の四連は；

見よ 惑星がのぼるのを  
星影のない軌道にそって，  
それは怒りの目を大きく見開き，  
叫ばずにはいられないのだ，



「おろかもよ！ 口をつつしめ！  
そんなふうにあおり立てるな！  
まだまだお前は若すぎる  
意見するなどもってのほか！

山々がふくらむのをみたか？  
木々が引き寄せられるのをみたか？  
ああ！ 怒り狂ったように鐘が打ち振られ！  
ああ！ 波のように打ち寄せる槍がみえる！

あれは怒った蛇か？  
ほら！ 身をよじり尻尾をくねらせて！  
彼のはくシューシューという音を聞け！  
そして彼の黄色い甲冑を見るのだ。

このあと汽車のたてる傍若無人な音、機関士、車掌、駅員の騒々しい怒鳴り声がつづき、“ぼく”は取り乱して家へ帰るところで終わる。これは汽車の夢を見てうなされた子どもの詩である。幼い頃から汽車ごっこを楽しみ、汽車の旅を喜んだキャロルが、近代文明の象徴でもある汽車を、少年の日の夢の中で怪物にしているのは一見意外なようでもあるが、ディッケンズの『ドンビー父子』（1846-8）から強い影響を受けたと思われる。「テラーズ」は、のちの『スナーク狩り』の詩調がうかがえるものとしても注目しておきたい。また『鏡の国のアリス』や『シルヴィーとブルーノ』の中の汽車の場面は、キャロルが実際に汽車の中で少女と友達になることが多かったことも含めて、特別重要な意味あいを持っている。

以上、キャロル自身の作品ばかり見てきたが、二番目の姉エリザベス・ルーシー・ドジスンも「名前のない話」1、2、や駄洒落を駆使した「パティアナ」などを書き姉妹のなかでは精力的に寄稿した。この頃でさえまだ、女性がものを書いて発表することは多くなかったようである。この雑誌には兄弟姉妹や叔母の寄稿があったものの、キャロルの才能が抜きん出てゆき次第に彼らとの隔たりが大きくなっていった。それだけ

一層彼は『牧師館雑誌』の思い出を大切にしていたようである。

#### IV. 結 び

キャロルは、1853年二十一歳のとき、家族とともに送った日々を回想して「孤独」という詩を書いている。この詩は、母親を喪った衝撃と子ども時代の終焉という二重の喪失感におそわれた彼の内面を描いた詩である。全体は十連あるが、おわりの二連は、

若き春よ、燦々とかがやける日々よ、  
無垢に 愛に 真実に満ち！  
想いの彼方に 目眩むばかりの  
若き日の魔法のような夢！

幾星霜 重ね来し富 なげうつとも  
滅びの生の運命 喜び棄てるとも、  
いまひとたび 幼き子どもにかえりたい  
光に満ちる 夏の一日常なりと。

(高橋康也訳)

である。この詩の感傷性は、二冊の『アリス』の献詩や跋詩にも似た形で繰り返され、さらに時をおいた『シルヴィーとブルーノ』正、続編の献詩の中にも見られる。正編には、

われらの人生は、すると、すべて夢にすぎないか  
金色の光のなかにほのかに見え  
時の暗くあらがい難き流れをよぎる夢か？

つらき悲哀に頭をたれ  
覗きめがねに笑いたわむれ  
われらは無為にうろうろするのみ。

人のささやかなる一日をわれら慌ただしく過ごし  
その陽気な真昼より  
静かなる終わりを迎えるに一瞥も送らず。

(柳瀬尚紀訳)

続編には、

見るものが必死で追いかけるが夢は姿をかわす…  
亡き母の胸におかれた硬い動かぬ手、  
もう決して握ろうとはせず、そして  
泣く子をなだめて眠らせることもしないが…  
私は そういうもののお話を書きたかったのだが  
いま私の話は終わる。 優しい妖精よ…  
まじめに愛し 遊びながらたしなめようとする  
小妖精という保護者よ…  
陽気にはしゃぐブルーノよ！ 彼をみたものは  
誰でも愛さずにはいられない、親しきものよ、私もか？  
最もいとしいシルヴィーに、いま私たちは  
言わなければならない！ “さよなら”と。

の献詩があり、回顧感の強いものになっている。1867年キャロルは「ブルーノの復讐」をギャティー夫人編集の「ジュディーお婆さんの雑誌」に発表した。これに書き足すよう強く請われていたがキャロルの筆は進まなかった。1868年の父親の死の影響が大きかったようである。父親の死をさかいに彼の宗教観、人生観に転調があったことが考えられる。

その後1872年ソールズベリー卿の子どもたちに妖精の話語っているがなお筆は進まず中断していた。1887年になって、十三歳の少女イーザ・ボウマンと出会ってから再び意欲的に書き始め、1889年さきあげた彼女の名前をダブル・アクロスティックに織り込んだ献詩を付けてようやく『シルヴィーとブルーノ』を出版した。(続編は1893年)。

キャロルは『シルヴィーとブルーノ』序文で、リッテラチャー(雑多な散乱物と文学のかぼん語)がたまったので、あとは一本の糸でよりあ

わせてゆくだけ、と手の内を明かしている。ゴンブリッチは『樺馬考』の「イリュージョンと視覚の袋小路」という章で、キャロルの詩「詩人ハ作ラルルモノニシテ生マルルモノニアラズ」の中の第四連を、詩人の絵画的表現のたとえとして引き合いに出し説明しているのに符号する<sup>(20)</sup>ので引用する。

まず文章をひとつ書く  
そいつをこまかくぶった切る  
そいつをかきませ 運まかせ  
さわった順に並べてゆく  
語句の順序がどうなるか  
さようなことは気にしない

というやり方である。さらに十二連ではキャロルのもう一つの秘策が明かされる。

だから読者の忍耐を  
ためすつもりで ぜったいに  
いつ だれが どこかを明かすじゃない  
つまりは終始徹底的に  
曖昧模糊たる晦渋さ  
こいつを旨とすることさ

(二連とも高橋康也訳)

この詩は1862年に『カレッジ・ライムズ』に載ったものだが、『スナーク狩り』や『シルヴィーとブルーノ』に最高に生かされたようである。おおくの少女たちとの交流から、彼の人生に妖精の気配をとらえる霊的な力(インマテリアル・エッセンス、キャロルはこの言葉を続編の序文で、目に見えないものを見る力を説明するのに使っている)をたくわえ、内なる子ども(妖精)を育て、あちらとこちらを自由自在にゆききして、子ども時代に大人を演じなければならなかった自分を最終的に逆転させ、作品のなかで自己解放した、と言っても良いのではないだろうか。『シ

ルヴィーとブルーノ』正、続編に登場する狂った庭師の自在なありようそのままに。『シルヴィーとブルーノ』正、続編の完読を待ってはじめてキャロルの幼児期は一層はつきりする。

【注】

- (1) 北星学園大学文学部北星論集第22号, 1984.
- (2) 主だったもの「実益と教育のための詩」, 「牧師館雑誌」, 「牧師館の雨傘」につづく四冊目の意味。
- (3) R. B. シェリダンの『恋敵』(1775) に出てくる人物。むずかしい語の誤用をするのでマラプロピズムという術語が生れた。
- (4) 1854年エドモンド・イエーツ編集で刊行された滑稽雑誌。
- (5) Lewis Carroll, *The Rectory Umbrella and Mischmasch*, foreword by F. Milner, Dover Pub., New York, 1971, pp.89-91.
- (6) Revised ed. by Denis Crutch, *The Lewis Carroll Handbook*, Dawson · Archon Books, 1979, pp.1-2.
- (7) Lewis Carroll, *Useful and Instructive Poetry*, ed. by Derek Hudson, Geoffrey Bles, London, pp.8-9.
- (8) *The Letters of Lewis Carroll*, ed. by M.N. Cohen, Macmillan, 1979, p.8.
- (9) Anne Clark, *Lewis Carroll, A Biography*, J. M. Dent & Sons Ltd., 1979, p.39.
- (10) D. ハドスン, 高山宏訳, 『ルイス・キャロルの生涯』, 東京図書, 1976, p.34.
- (11) Lewis Carroll, *Sylvie And Bruno*, The Nonesuch Press, 1973, p.299. 柳瀬尚紀訳, れんが書房新社, 1976, pp.299-300.
- (12) ルイス・キャロル, 高橋康也訳, 『ルイス・キャロル詩集』, ちくま文庫, 1989, p.10.
- (13) Anne Clark, 同上, p.49.
- (14) 『シェイクスピア全集, ヘンリー四世』, 小田島雄志訳, 白水Uブックス16, 1995, pp.159-160.
- (15) E. H. ゴンブリッチ, 二見史郎ほか訳, 『樺馬考』, 勁草書房, 1994.

- (16) 図2は、ニコラス・パウエル、辻井忠男訳、『フューセリ 夢魔』、みすず書房、1979、口絵。図3は、『棒馬考』 p.243.
- (17) *The Lewis Carroll Handbook*, pp.2-4.
- (18) Roger Lancelyn Green, *The Story of Lewis Carroll*, London; Methuen,1949, p.18.
- (19) Lewis Carroll, *Sylvie and Bruno*, The Nonesuch Press, p.294., p.632. 『ルイス・キャロル小事典』の吉田映子訳を参考にした。
- (20) ゴンブリッチ、『棒馬考』 p.313.

Abstract

Lewis Carroll's Family Magazines

— As a Germ of *Sylvie and Bruno* —

Kumiko TAIRA

This paper tries to link Lewis Carroll's early works, the Family Magazines, to his last ones, *Sylvie and Bruno* and *Sylvie and Bruno Concluded*, and to make clear that the world of *Sylvie and Bruno* is the same as that of the Family Magazines.

For this purpose, we pick up the first two, *Useful and Instructive Poetry* and *The Rectory Magazine*, from his eight Family Magazines. The former is his first book composed in 1845 and all by himself when he was thirteen. The latter is the second book and it was composed from 1845 to 1848 with the general contributions of his family.

Almost all of Carroll's early works have a touch of maturity for his age, in his usage of words and his way of handwriting. We notice a kind of conflict with paternity or authority in reading those early writings. But "Juvenile Jenkins" in *Useful and Instructive Poetry* is only one exception because of its childlikeness and presence of Jenkins' mother. He draws two illustrations of Jenkins jumping on a hobby horse and kissing his mother.

These Magazines show us not only how and when his scribble-mania began, but also how strong was his ambition to draw his visual images. This gives us a key to interpreting his later works.

In order to examine Lewis Carroll's illustrations, we depend on the idea of a hobby horse as the roots of artistic form which E.H.Gombrich presents in his *Meditations on a Hobby Horse*.

“Horrors” and “Terrors” in *The Rectory Magazine* reveal the strange and distorted vision of dreams with which Lewis Carroll was possessed. Gombrich says that Gillray’s “A Phantasmagoria” or Fuseli’s “The Nightmare” are the imagery and iconology of the Romantic Period, so Lewis Carroll catches the prevalence of the “phantasmagoric” spirit and later he names his poems *Phantasmagoria*.

In *Sylvie and Bruno* Carroll returned to the world of the Family Magazines and re-examined the conflict between father and son, his phantasmagoric themes and others.



北星学園大学文学部 北星論集第34号 正誤表

| 頁・行目           | 誤       | 正      |
|----------------|---------|--------|
| 21頁5行目         | 華人      | 人々     |
| 66頁17行目        | すべ__    | すべて    |
| 67頁下から<br>10行目 | ル__シー   | ルニシー   |
| 82頁1行目         | __り     | かかり    |
| 82頁下から<br>9行目  | ラトウ__ツジ | ラトウイツジ |
| 91頁2行目         | 完読      | 完結     |